
みちのくラーメン わらべうた

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みちのくラーメン わらべうた

【著者名】

Z6579H

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

都会の一隅で小さなラーメン店を営む私。ほとんど密はやってこないが、不思議と何とかなつていて。しかしこの店の近所には、どうやらもつと流行つていて、あるらしい。

ぶつた切つたような怒号で目を覚ました。激しい雨に水たまりを踏むびしやびしやいう音が混じつて、深夜の路地は冷たく沸き立ちかけている。3人、4人……私は布団の中で人数を数えた。喧嘩か？ どうでもいい。続く怒声。溜息が出る。仰向けに見上げると、カーテンのない窓に稻妻のような雨垂れが走っていて、都会の埃を吸つた水は、外灯の光に白く脈々と輝いていた。そこに一瞬、鳥の翼のような黒い影がよぎつた。

喧嘩が消えた。

私は布団から起き上ると、そっと窓から外を窺つた。浴びせかけるような雨に打たれて、泥の上に一人の男が横たわつている。地面はあばたのような水たまりを作り、古い魚のように平たく弛緩した二人の人間を、いまにも呑み込まんばかりだ。白熱灯の光が、いかにも弱々しくこの光景を覆つていた。男らの衣類が雨粒を受けて、餌を求める下等生物の体のように震えているのが見て取れた。

ふと私は手前の男のさらに手前、雨滴に沸く水たまりの上で、一枚の紙片が水すましのように回転しているのに気がついた。

私は遠目にもそれがなんであるか、すぐにわかつた。

「みちのくラーメン わらべうた」のサービスチケットだ。

暗い暗い水の中を泳いでいる。頭上につけた水中ライトの光だけが、この闇を照らす唯一の手がかりだ。褪せた桃色の珊瑚をかき分け、私はある構造物に辿り着く。フジツボだらけの鉄板……沈船の一部だ。

私はバールを取り出すと、ハツチにとりついてこじ開けにかかる。堅牢なハツチも既に腐食し、私が体重をかけると、周囲の壁もろともぐらぐらと揺れた。頃合いをみて足で押すと、ハツチは内側にぼこりとへこんで、そのまま中へと落つこちてゆく。ひと呼吸おいて、

暗闇の奥から無数のごみが舞い上がってきた。私は気にせず、中へ入る。

そこは死者の雑居房だ。肉が落ち、骨だけとなつた難破者の死骸が、ばらばらになつて折り重なつていて。5人、6人、いや……。数えてなんになるだろ。人の形をとどめているものは希だ。水中ライトの光を受けて、虚ろな髑髏は眩しそうに目をそらした。小さな魚が壁に沿つて銀鱗を閃かせている。私は脆い床を踏んで、船室の奥のドアに進もうとした。そのとき、ひとりわざわざ大きな魚が私の目の前を横切つた。いや……。

それは、床から舞い上がつたごみの一枚、何かの樹脂でできたポイントカードだつた。

もちろん「みちのくラーメン わらべうた」のカードだ。

私は建物の上のほうから、灰色の街路を見下ろしている。汚いガラス越しに見える町並みは暗く翳つて、いまにも大雨が落ちてきそうな気配だつた。道にはもう人つ子一人いない。

左手のほうに、一区画を占める竹藪がある。そこに一匹の犬がいるのに気がついた。犬たちはしきりに藪に潜つては、また現れてを繰り返している。あそこに何があるのだろうか。すると、一二頭の犬が急にぴんと耳を立てた。

街路の右手から中年の女性が歩いてくる。どこかからの帰りだろうか、太り気味の体に、ブルーチーズのようなワンピースが華やかな色を添えている。片手に黒いハンドバッグ、もう一方の手には大きな紙袋を抱えていた。

女性がちょうど正面に来たとき、にわかに犬どもが藪から走り出た。女性は少し驚いた様子だつたが、犬が横を駆け抜けられるようすいと動いて道を空けた。だが、犬たちは女性の前で足を止めると、つま先立ちに跳ねながら、激しく相手に吠えかかつた。

女性はハンドバッグを振り回すと、半身に警戒しながらその場を立ち去ろうとした。ところが、振り回したハンドバッグに犬の一頭

が噛みついた。女性は何か叫び声を上げ、紙袋を取り落として、両手でハンドバッグの紐を掴む。革紐がぴいんと伸びて、腰の引けた女性と腰を落とした犬との間に、一本の平行線を描いた。

この隙を見逃さず、もう一頭の犬が、女性のふくらはぎに喰いついた。女性はハンドバッグの紐を放し、犬の頭を殴ろうとする。だが、目をむいた犬はその一撃に耐えた。ハンドバッグを奪った犬はすかさずそれを地面に落とし、今度は中腰になつた女性の肘に食らいつく。そのまま顎の力で中肉の腕にぶら下がつた。パニックに陥つた女性が悲鳴を上げる。

助けなければ！ 私は窓辺を離れて、階段を探した。そこはかつて自分の通つた小学校だつた。私もいつの間にか小学生に戻つていた。階段を駆け下りると、踊り場の窓から犬に襲われる女性の姿が見えた。

下の階に駆け下りるとき、女性はまだ両足で立つて、必死に犬らを振り払おうとしていた。

その下の階に駆け下りるとき、女性は膝をついていた。ふくらはぎに喰いついていた犬は、顎の位置を喉笛に変えていた。

その下は一階だつた。ここからはもう女性の姿は見えない。私は校舎の前庭に駆け出そうとして躊躇した。校門を出たとき自分一人ならば、今度は私が襲われるかもしれない。

だが、校舎の反対側から、大人の男が何人か、校門に向かつて駆けてゆくのが見えた。私はそのあとに続いた。

路上に倒れた女性の周りには、まつ黒い血だまりができていた。投げ出された紙袋から、なにか四角い紙包みが飛び出している。男たちが近づくと犬は犠牲者を離れ、耳を伏せて激しい唸り声を上げた。だが、果然怯まない男らを見て、犬はもときた竹藪の方に退散していった。大人たちが何か叫んでいる。私はその全てを戦慄して見ていた。と、黒いハンドバッグの口が開いて、血溜まりの上に何かを吐き出しているのが見えた。その大きさと形から、私はそれが何であるのか、すぐに分かつた。

「みちのくermen わらべうた」の割引券である。

私は目を覚ました。店の中は静まりかえっている。スープを煮込む古ぼけたヒーターだけが、ときおりカタカタと小さな音を立てていた。私は伸びをした。

カウンターの上に、からになつたドンブリが置いてある。スープは半分残してあつた。そういうえば、さっきまでここに客がいたのだ。あたりを見回しても、代金を置いていった様子はなかつた。私が寝込んだのをいいことに、またもや食い逃げされたのだ。

外は雨だつた。昭和の頃から使つてゐる古い暖簾はくすんだように黒ずんで、店の前に雑巾を垂らしたようになつてゐる。23時を回つていた。今日はもう店じまいでいいだらう。私はぐしそぐしょの暖簾を店内に入れると、それを乾かすためにテーブルの上に広げた。もう何が書いてあるのか全然分からぬ。

私はスープにガラを足し、水を加えると、加熱器の温度つまみを80度に調整した。スープは24時間煮込み続けるのである。洗い物を終えて、くしゃくしゃになつたキヤスターの箱から一本取りだす。備え付けのマッチで火をつけた。煙はやがて店の隅々にまで広がつて、ヤニに汚れた壁に新しい薄膜を作るだらう。

不意に電話が鳴つた。

「はい」

「あ。わらべうたさんですか？ 出前をお願いしたいんですけど」

「まだ。まだ。うちにかかる電話のほとんどは、この電話なのだ。

「違いますよ。番号をお間違えじやありませんか？」

そういうて、有無を言わさず電話を切る。一、二度続けてかかることがあるが、一回取ることは絶対にしない。無駄なことだから。

「わらべうた」は、近所にあるらしいライバル店である。らしいところのは、正確な場所を私も知らないからだ。もつとも、何度か

見たことはある。この界隈は路地が複雑に入り組んでいて、壁の向こうが一体どんな区画になつていいのか、一向に分からぬ古い土地なのだ。こんなところにあるラーメン店なのだから、客が混同するのも無理はない。

いちど、行つてみたりどうだらう。ふと、そんなことを思つた。

「うちは定休日のない店だ。休んだところですることもないから、とにかく店は開くことにしている。客はあまりやつてこない。固定客に至つては一人もいない。どうして暮らしていけるのか自分でも不思議だが、ともかくもどうにかなつていいのである。ここで一日休んだところで、どうとこうとはないだらう。

「そうだ。明日、いつてみよう。その「みちのくラーメン わらべうた」に。

翌日の昼前に、私は店を出た。記憶を頼りに狭い路地を徘徊する。だが店は見つからなかつた。やがて私は交番の前に出た。そこで警杖を突いた若い警官に道を尋ねることにする。

その店は、私の店と同じ区画にあるようだつた。壁を接しているかもしれないほど近くだ。だが驚くほどのことでもない。こういう土地では、実際にどのような建物と軒を交えているか、把握することすら難しいものだ。

やがて、それと思しき店の前に出た。暖簾は黒ずんで、なんと書いてあるか判読できない。昼時だというのに店内は暗かつた。私は入り口の取つ手に手を掛けた。が、それはガタガタ揺れるだけで開かなかつた。休業日なのだ。

暖簾を下ろしたまま、本日休業しますの告知もしないで休んでいるのか。おまけに定休日なども書いていない。私は怒りを覚えた。この数十分をどうしてくれ。この間にも、私の店には新しい客が来ていたかもしれないのに。

私は汚れきつた店のガラスを透かして、そつと中をのぞき込んだ。

カウンターの上に、だらしなくタバコの箱が放り出してあった。

店に帰ると、ドアの前に置いている絨毯が丸まつっていて、誰か留守中の訪問者が踏んだのだと知れた。客だったかもしない。残念なことだ。私は「みちのくラーメン わらべうた」の主人に対し、深い憤りを感じた。

その日、ほかに客は来なかつた。ふと気づけば、スープに足すガラが切れている。前回注文したのはいつだつたろう。私は記憶を辿りうとした。何も思い出せない。やがて頭痛を感じはじめた。いつもこうだ。いつもこうなのだ。

いらついた私はスープ鍋のふたを開けると、しゃもじで荒っぽく搔き回し始めた。白く不透明なスープの底で、重い骨の堆積がしゃもじに絡みついた。

私はいらついている自分にいらついた。少し落ち着こうとして、軽く鼻歌を歌い出す。それは名前も忘れた古いメロディ、わが古里のわらべうただ。歌にあわせてしゃもじを回す。

重い鍋がごとごと揺れ、下手くそな私の歌に、あくまでも不規則に唱和した……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6579h/>

みちのくラーメン わらべうた

2010年10月8日15時17分発行